OISCA

―人と育む、地球といきる―

〔TOPIC〕

不安の中に希望のたねをまく

～ミャンマー研修センターの今～

MAY 2025 | 5

今月の
OB＆OG

日本で学んだオイスカ研修生の今を紹介します。

FILE No. 05 ヴィマル・デュット(49)

愛称：ヴィマル

- 出身国　フィジー
- 研修歴　中部日本研修センター／JICAコース（2000年1月～12月）
- 現在の職業　サトウキビ生産者協議会　最高経営責任者

中部日本研修センターにて（2000年）

成功者になるための学びが詰まった研修でした

Bula！（こんにちは）

私はフィジーの主要産業であるサトウキビの栽培に携わる人たちを束ねる組織で、最高経営責任者を務めています。サトウキビ産業の発展のためにアジアやアフリカに出張することもあり、忙しく過ごしています。

私のオイスカとの関わりは、1997年にフィジーにあるオイスカの研修センターで学んだことが始まりです。もともと実家が農家でサトウキビの栽培をしていましたが、オイスカでの学びは農業の技術にとどまりませんでした。特に2000年に来日し、中部日本研修センターで約１年間研修生として過ごす間、規律正しく、責任を持つ生き方を学んだことで、私の考え方は大きく変わりました。私は常々人生の成功者でありたいと考えていますが、オイスカで身につけた姿勢は、今の私の仕事につながっていると感じています。オイスカで自然に根差した実践的な農業についても学び、それを活かしながら母国の農業、産業の発展に尽くすことができ、成功者になるための特別な研修を受ける機会をいただいたことに感謝しています。

今年の秋、オイスカフィジー研修センターは35周年を迎えます。日本からもたくさんの会員の皆さんにお越しいただきたいと願っています。

現在2エーカーの農場を所有。自家消費用のお米も育て、自宅で精米

創立者のことばを紐解く

日月星辰

公益財団法人オイスカ　理事長　中野悦子

陰力（月の働き）の尊さ

「月日と大地の働きは皆一体であって、切り離すことは出来ない。例えば、太陽の光と熱とは太陰（月）の陰力（引力）で地上に引き寄せられ、物体に反射して起こる。地上に萬物という対象物があって、合わせ鏡のように陰力で地上を照らしわたる。漠然とした表現と言われようが、陰力を無視することは出来ない。

人間の社会にも『お陰さまで』という言葉があるように、陰力とは不思議な力である。もしも、人間の社会から、この言葉が失われたならば、人の世はさらに殺伐となり、無味乾燥となるに違いない。『お陰さまで』という言葉を使うとき、人の心は謙虚になるとともに、精神的には豊かになり、穏やかな雰囲気となる。陽の働きは誰の目にも明らかであるが、陰の力は目につかず、知らぬ人が多い。とはいえ、実に尊きは陰力である」（創立者のことば）

太陽の光が当たって暖かいところを『陽だまり』と言いますし、地上に降り注ぐ太陽の光が弱い状態のことを『日照不足』と言い、露地栽培では生育や収量が大きな影響を受けます。このように、陽の働きは誰の目にも明らかです。一方、月は一般の人にとっては『満月・中秋の名月』というように愛でるものです。しかし、林業を営む人は、木を伐る時期を月の満ち欠けによって決めると言います。それは水分の含み具合が月の満ち欠けに左右されるからです。木が水を吸い上げていることも地に下ろしていることも目には見えません。しかしながら、地上の萬物の生命に関わる水の働きを司っているのがお月様だと言えましょう。「実に尊きは陰力である」です。

日常何気なく使っている『お陰さまで』に込められた深い精神性と働きを心に留め、時代が如何に変わろうともこの言葉を大切にしていきたいものです。

OISCA　MAY 2025 | 5

Contents

04　OISCA NEWS　海外／国内

06　オイスカ便り　茨城推進協議会

08　TOPIC　不安の中に希望のたねをまく
～ミャンマー研修センターの今～

10　今月のこの人　株式会社鶴田工業　技能実習生　アブドゥル・ラザク・イパエニン

12　OISCA SQUARE　オイスカ歴史さんぽ／OISCAレストラン／お！ススメOISCA

14　INFORMATION　新着情報 ほか

What's OISCA

オイスカ・インターナショナルは、「すべての人々がさまざまな違いを乗り越えて共存し、地球上のあらゆる生命の基盤を守り育てようとする世界」を目指して1961年に創立された国際協力NGOです。現在、41の国と地域にネットワークを持ち活動しています。

公益財団法人オイスカは、1969年にオイスカ・インターナショナルの基本理念を具体的な活動によって推進する機関として生まれ、主にアジア・太平洋地域で農村開発や環境保全活動を展開。特に人材育成に力を入れ、オイスカの研修を修了した現地の青年は、各地で地域開発に取り組んでいます。国内では、農林業体験やセミナー開催などを通して啓発活動を積極的に進めています。

OISCAという名称の意味

O	rganization	機構
I	ndustrial	産業
S	piritual	精神
C	ultural	文化
A	dvancement	促進

人間の生存に不可欠な“産業・精神・文化”のバランスを大事にした発展を世界規模で推進していくことを目的として、このように名付けられました。

国内 第46回東京フォーラム

11ヵ国15名の在日大使館関係者と継続的な連携に向け意見交換

2月27日、衆議院第一議員会館で第46回オイスカ東京フォーラムが開催され、オイスカが活動しているアジア・太平洋地域のうち、11ヵ国の大使館から4名の大使をはじめとする15名の外交官や外務省のNGO協力推進室の岩上憲三室長らが出席しました。

冒頭、オイスカ・インターナショナルの中野悦子総裁より、創立時の理念のもと、60年以上にわたりオイスカが取り組んできた産業支援や環境保全活動について紹介されるとともに、現在、世界が直面する気候危機に対して警鐘が鳴らされました。また、オイスカ国際活動促進国会議員連盟の事務局長である谷公一衆議院議員からは、「グローバルサウスの課題解決のため、皆さんと連帯して取り組みたい」との議員連盟の会員である石破茂首相のメッセージが紹介されました。

主に日本と同じ島国の外交官からは、極めて低い食糧自給率が課題であり、農業の普及、振興や、そのための人材育成に取り組むオイスカへの期待が寄せられました。また、各国での諸活動への資金獲得についても意見交換が行われ、岩上室長が紹介した外務省の日本NGO連携無償資金協力に対する関心が寄せられました。さらにタイのウィッチュ・ウェチャーチーワ大使からは、同国内で進む各種植林プロジェクトへの日本企業による支援や、例年大使館関係者も参加している富士山の森づくりに多くのオイスカ会員企業が協働していることを例に挙げ、タイ企業の巻き込みを図るためのアイデアが提案されるなど、今後の連携促進に向けた有意義な会合となりました。

外交団を前にあいさつする中野悦子総裁

国内 中部日本後援会

新会長に勝野哲氏が就任 国内外の活動支援強化を呼びかけ

2月20日、中部日本後援会の幹事会および活動報告会が名古屋市内で開かれました。同会は、中部経済連合会に所属する長野、岐阜、静岡、愛知、三重の5県のオイスカ会員企業57社（うち幹事企業15社）で構成された組織で、オイスカ活動をさまざまな形で支援するために2004年に発足しました。

幹事会には、幹事企業9社のほか、愛知県支部会長をはじめとする役員、事務局スタッフや中部日本研修センタースタッフも参加し、本年度新会長に就任した中部電力会長の勝野哲氏が紹介されました。あいさつに立った勝野新会長は、センターで行われている人材育成事業などに触れ、こうしたオイスカの活動を継続的に支援していけるよう努めていくことを呼びかけました。

続いて行われた活動報告会では、本部・海外事業部の林久美子が海外植林プロジェクトの近況を報告しました。

なお勝野新会長は本年6月、中部経済連合会の会長に就任予定です。

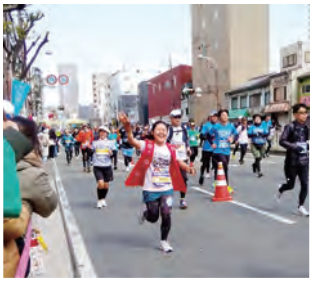
活動報告会には個人会員も参加

国内 大阪マラソン2025

「海岸林再生プロジェクト」支援 寄附先団体として10度目の参加

2月24日、大阪マラソン2025が開催されました。オイスカは2004年からチャリティ寄附先団体として参加し、今回で10度目となりました。今大会は、「海岸林再生プロジェクト（以下、プロジェクト）」を支援するネクスタ株式会社、化学総連、ライフ労組、JR西労組、関電労組や、国内外のオイスカ研修センターなどから27人がチャリティランナーとして出走。当日は、雪がちらつき凍えるような寒さの中、ベストを尽くして熱い走りを見せるランナーに、オイスカ関西支部の上村良成会長、岡崎昌三前会長や各企業、労組などからの応援団35人が沿道から声援を送りました。

プロジェクト担当部長の吉田俊通は「チャリティマラソンを通じて活動を応援いただいた多くの方々に感謝している。海岸林再生への挑戦に、これからもぜひ関心を寄せ続けてもらいたい」と話します。これまで、オイスカのチャリティランナーとして出走した人数は、延べ333人に上ります。


ウズベキスタン沙漠化防止プロジェクトの元調整員青山優菜さんは、同国の伝統的な羽織を着て出走。笑顔で完走を果たした

海外 ウズベキスタン

中央アジア国際気候会議に参加 駐日大使からの感謝状贈呈も

オイスカ本部は、4月4・5日にウズベキスタンのサマルカンドで開かれた中央アジア国際気候会議に永石安明専務理事と藤井啓介海外事業部人材育成担当部長を派遣しました。また、現地で活動する専門家の冨樫智氏やプロジェクトスタッフで訪日研修生OBのジャンボラート（2023年に四国研修センターで研修）もメンバーとして参加しました。

会議では、世界平均の2倍の速さで温暖化が進む中央アジアが直面する生態系や水資源の損失など、持続可能な開発に対する重大なリスクに、地域が連係を強化しながら対応するための議論が行われました。オイスカは、アラル海で進めている沙漠化防止プロジェクトを、ウズベキスタン共和国生態系・環境保全・気候変動省大臣や他の閣僚に紹介し、これまでのウズベキスタン国内でのオイスカの取り組みが高く評価されました。さらに、今後の更なる協力も要請されました。

今回の会議への参加は、アラル海におけるオイスカの取り組みに注目を寄せているウズベキスタン政府の招きで実現したもので、永石専務理事は「これをきっかけに政府との連携を深め、アラル海の沙漠緑化にとどまらず、農業振興やビジネスマッチングなど、さまざまな側面から両国の発展に寄与していきたい」と話しています。

なお2月1日には、在日ウズベキスタン大使館で行われた感謝状贈呈式に中野悦子理事長が出席し、ムフシンクジャ・アブドゥラフモノフ駐日大使より、感謝状が授与されました。

国際会議に出席した4名。右からジャンボラート、永石専務理事、冨樫氏、藤井担当部長

国内 人材育成事業

2024年度研修修了式を各地で開催 支援者への感謝の気持ちとともに帰国

昨年12月から今年2月にかけて、2024年度の研修修了式が各センターで行われ、22名がそれぞれの目標を胸に、帰国の途につきました。

22年度から2年コースでの研修を実施している中部日本研修センターでは、23年度に入所した農業研修生4名と国際ボランティアー名の修了式を2月22日に開催。2年コースでは、宮城県で進む「海岸林再生プロジェクト」や東京のオイスカ本部での研修に全員が参加するなど、長期研修ならではの充実した研修内容となりました。修了式当日は、研修を支えてくださった会員、ボランティアの方々や各種交流プログラムで親しくなった地域の方々70名がセンターに集まり、修了生5名との別れを惜しみました。参加者からは「研修期間が2年あると日本語も上達するし、より多くの人と深いつながりを築けるのだと感じられる修了式だった」との声が聞かれました。

なお、今年度はIIヵ国・地域から22名が来日し、すでに研修がスタートしています。

Tシャツにメッセージを書き込む様子。修了式後の懇親会は、修了生自らが趣向を凝らして企画した思い出に残るものとなった

国内 山梨県支部

木育で叶える！ 心と地域産業の復興

3月15～17日、オイスカ山梨県支部4名が、昨年1月に発生した能登半島地震で被災した珠洲市と金沢市を訪問。支部は木育を通じた震災復興を目指し、昨年9月より現地でニーズ調査や木育ひろばなどを実施してきました。

3度目の訪問となる今回は、これまでに寄贈した木製玩具やつみ木を使い、被災地の方々が主体的に木育ひろばを実施できるよう、ノウハウを伝える木育スクールを開催しました。県内の大学関係者や行政関係者、保育士などが参加し、木育について学び、復興への思いを共有するとともに、今後の協力体制構築に向けての意見交換も行われました。

また、石川県の県木で木材として親しまれる「能登ヒバ」を活用したつみ木の制作を地元の奥能登元気プロジェクトに依頼し、木育スクールの参加団体へ寄贈しました。木に触れ、自然の尊さを学びながら、心を豊かにする木育を地元から盛り上げ、心と産業の復興につなげられるよう、活動を続けていきます。

今回の活動は、赤い羽根「災害ボランティア・NPO活動サポート基金」（ボラサポ）の助成を受けて実施しました。

思いを共有し、つながり合う場は、大人の「心の復興」にもつながる

オイスカ便り

全国の支部や支援組織をピックアップして紹介します

今回は

茨城推進協議会

国の未来を担う子どもたちへ ネグロス島で多様な教育支援を展開

茨城推進協議会は、1987年より長年にわたってフィリピン・ネグロス島の子どもたちの支援に取り組んできました。最初の活動は、保育所の建設です。当時、子どもの数が増加する中で保育所の整備が追いつかない状況にあり、オイスカバゴ研修センターから要請を受けた当会は「子どもたちへの教育支援は、国の発展にとって極めて重要」との認識のもと、募金活動を展開。88年に1棟目の保育所「茨城デイケアセンター」がバゴ市のタブナンに完成しました。開所式には茨城県のオイスカ会員が参加し、私自身も施設が完成した喜びと、地元の方々が心を込めて準備してくれた精一杯の歓迎行事に目頭が熱くなったことを思い出します。その後、毎年1棟ずつ建設することを目標に取り組み、今では26棟が完成し、1千人を超える子どもたちが保育所に通えるようになりました。

デイケアセンターにはいつも子どもたちの元気な声が響く

また「ネグロス島では、楽器やスポーツ用具が不足しているため、音楽や体育の授業で何をしていいのかわからない」という現場の声をオイスカ関係者から聞き、日本全国の学校や団体などの協力を得て楽器や文房具、スポーツ用品を集めて現地に提供したり、各種教育施設の整備などにも力を入れてきました。

日本から届いた楽器を使って演奏される「イバラキコンサート」は、バゴ市の大きな行事になっている

2009年には、全国のオイスカ会員や県内企業の資金協力を受け、バゴ研修センターの敷地内に「日比青年交流センター」を建設。11年には武道場、15年には陸上競技場が完成し、今日まで日本とフィリピンの青少年の交流拠点として活用されています。武道場「至誠館」では、子どもから大人まで参加する剣道の稽古が毎週行われており、フィリピンの全国剣道大会でトップクラスの成績を収めています。さらに、柔道の講師の派遣や大会の開催など柔道の普及にも取り組み、現在はバゴ市立大学をはじめ4つの大学で稽古が行われ、参加者も年々増えています。

このような活動を継続してこられたのは、ひとえにバゴ研修センターの渡辺重美所長をはじめ、多くの会員の皆さんのご支援によるものであり、心から感謝申し上げます。

茨城推進協議会　会長兼事務局長
小野瀬 武康

支部概要

1978年に茨城支局発足、2011年に茨城推進協議会に改編。現在はフィリピン・ネグロス島の子どもたちの教育支援を中心に、地元小学校とも連携しながらマングローブ植林などにも取り組んでいます。2003年には、授業の始まりや終わりを知らせるチャイムの代わりに「平和の鐘」を小学校や公的機関に寄贈。これまでに約190個を届けることができました。これからも40年近くにわたるネグロス島の子どもたちへの支援を継続し、さまざまな活動を通して、島の発展に貢献していきます。

近況

REPORT

学生に海外研修の機会を提供 武道普及の成果も確認

2月16日～3月1日、フィリピンで常磐大学の海外研修を実施しました。2015年に推進協議会の活動を知った同大学の教授から、ネグロス島を案内してほしいと要請があったことをきっかけに、協力関係が続いています。16年には、常磐大学とバゴ市立大学の連携に向けた現地ツアーを実施し、両校間で英語学習やバゴ研修センターを交えたさまざまなプログラムの実施にかかる相互連携協定が結ばれています。学生の海外研修は17年に始まり、5回目となった今回は10名の学生が参加。バゴ市立大学での英語学習では、現地学生の親切で熱心な対応により、学生の英語力は飛躍的に高まりました。またバゴ研修センターを訪れ、シルク製品づくりの調査や、常磐大学のある水戸市の梅染めとネグロスの草木染めで組み紐をつくる商品開発、日本の遊びを紹介する日本文化交流など、5つのプロジェクトに取り組みました。

バゴ市立大学訪問

休日には、マンボカルリゾートやグレイスランド・リゾートを訪れ、素晴らしい風景の中で充実した時間を楽しむことができました。また訪問中に、バゴ市の市政59年記念行事が開催され、記念パレードに参加。バゴ市の各地区が特産品の販売や飲食店の出展などを行うババイラン・フェスティバルの会場も訪れ、楽しい体験となりました。

2月22日には、武道場「至誠館」で第1回の剣道大会を開催し、近隣のミンダナオ島やイロイロ島からの参加者もあり、熱のこもった大会となりました。翌23日には、フィリピン剣道連盟主催の剣道昇級・昇段審査が実施され、「至誠館」の生徒も多数参加。全員が合格することができ、生徒たちは大喜びでした。立ち会った現地の剣道の先生方からは、「至誠館」の生徒の技術に高い評価をいただくことができました。

「至誠館」での剣道大会

一方、ネグロス島の柔道の振興を図るため、柔道用の畳約260枚を茨城県鹿嶋市からバゴ研修センターに送りました。センターから、バゴ市立大学をはじめ、ネグロス島の各大学に届ける予定です。これにより、ネグロス島での柔道が一層盛んになることを期待しています。

おらが自慢！

四季の美しい景色とおいしい特産物が楽しめる！

ブルーにそまるネモフィラ、絶景です！

茨城県の人気スポットとして、四季折々の花が咲き誇る国営ひたち海浜公園があげられます。ネモフィラやコキアは、季節を代表する植物として親しまれています。ハイキングが楽しめる筑波山や広大な景観の霞ヶ浦も県を代表する観光地です。県北地域の山地や渓谷では、秋の紅葉シーズンに見られる自然の景色が美しく、多くの人が訪れています。近年は、トレイルランニングが盛んに行われるようになり、難関コースとしてランナーに人気です。

水戸市の偕楽園も日本の三名園として有名です。3000本の梅の木があり、観梅の季節には多くの人で賑わいます。

また特産品の常陸秋そばは、その味を楽しみに、県外からもたくさんの人が訪れます。冬の季節には黄金色に輝くような干し芋もおすすめです。

ほかにも、広大な平坦地と180kmの長い海岸線を有する茨城は、メロンやナシ、スイカ、柿、栗、イチゴなどの果樹・農産物や新鮮な魚介類の宝庫でもあります。中でもあんこう料理は有名です。

美味しい茨城の食を、ぜひ豊かな自然の中で楽しんでください！

TOPIC

不安の中に希望のたねをまく

～ミャンマー研修センターの今～

2021年2月1日のクーデターから4年半。ミャンマー国内では、約320万人が避難生活を強いられるなど困難に直面しており、現地のオイスカスタッフは不安を抱えながらも前を向き、日々研修や農場の管理に励んできました。頑張る彼らの姿をお伝えする誌面を準備していたところ、3月28日にミャンマー中部を震源とする大地震が発生。さらなる不安と困難が彼らを襲いました。落ち着きを取り戻してきていた地震前までのセンターの様子、そして再び混乱の真っただ中にあるセンターの今を、本部・海外事業部の藤井啓介がお伝えします。

クーデター以降の現地スタッフの挑戦

「以前と比べて、センターの朝は静かになりました」

最近の様子を聞くと、スタッフのイーシュエジンウィン（愛称・イー）さんが一言。国内外のオイスカ研修センターでは、朝の点呼や国旗掲揚を行いますが、ミャンマーでは治安悪化を理由に、現在は実施されていないのです。

イーさんが勤務するミャンマー農業指導者研修センターは、2017年に国内2番目のセンターとしてピョーボエ郡に開所、19年までの3年間で、63人の農村青年が10ヵ月間の研修を修了しました。20年からは、コロナ禍や情勢悪化で研修を一時中止せざるを得なくなり、その間の農場管理や食品加工などは、スタッフのみで行っていました。イーさんは当時の様子を、「研修生がおらず静かで、張り合いがなかった」と振り返ります。

そのような中でも、農業研修を希望する農村青年のために本来のセンターの姿を取り戻したいとの思いで、23年から研修を再開。情勢を考慮して、期間を5ヵ月に短縮し、人数を10人（男性7人、女性3人）に制限した上で、有機栽培による稲作・蔬菜栽培、養鶏、食品加工、日本語など、実習を重視した従来のカリキュラムを実施しました。今年2月3日には、24年度の5期生13人（男性6人、女性7人）が修了式を迎えています。

研修生の大半が10～20代で、センターのある中央乾燥地域の出身です。農家出身者もいれば、オイスカで初めて農業に挑戦する青年もいます。修了式では、「種まきから収穫まで、実践を通して学べて有意義だった」「時には厳しく、時には優しく先生に指導してもらえた。同世代の仲間と生

「子供の森」計画のエコキャンプの様子（帽子の女性がイーさん）

活を共にして、友情も芽生えた」といった感想が聞かれました。厳しい情勢の中でさまざまなバックグラウンドを抱えながらも、仲間とともに研修に励んできたのだと思います。その彼らが成長し、将来各地で活躍してくれることが、スタッフやセンター、ひいてはミャンマーの明るい希望につながっていくはずです。

一方、エサジョ郡に位置するミャンマー農村開発研修センター（第一センター）は、1997年に開所し、これまで430名の青年に研修を実施。その他、WFP（国連世界食糧計画）との連携事業など多くの農村開発事業に取り組んできましたが、クーデター以降、治安が安定せず、現在も研修を再開できていません。しかし、スタッフが農場管理のほか、21年の「ミャンマー支援・緊急募金」を活用した食糧支援や農業支援を懸命に続けています。

両センターは、これまで多くの人々の努力と協力によって支えられてきました。そして今、現状の情勢下で奮闘しているのは、オイスカで研修を修了したOB・OGです。

私は、06～13年にミャンマーでの駐在経験があり、帰国後は本部の担当者として現地の活動を間近に見てきました。彼ら、彼女らのひたむきさには、日々頭が下がる思いです。

地域のためにできることを

コロナ禍やクーデター発生前のような落ち着きを少しずつ取り戻してきたミャンマーでの活動を再び大混乱に陥れたのは、3月28日に発生した中部地域、マンダレー付近を震源とするマグニチュード7.7の大地震でした。第一センターには被害はありませんでしたが、震源地から近い農業指導者研修センターは大きな揺れに見舞われました。幸い、スタッフや研修生に負傷者は出ませんでしたが、天井が落ちる、倉庫の壁が崩れるといった建物への被害が確認されました。

スタッフはこれまでの緊急支援の経験を活かし、被害情報や支援ニーズの把握に努め、役場などと連携し、ガレキ撤去のための重機用の燃料支援のほか、被災者やその救出のために活動するボランティアらに飲み水を提供するなど、迅速に行動を開始。その後もセンターで準備した弁当を配布するなど、緊急支援活動を続けてきました。最高45度にもなる厳しい環境の中、被災者にいち早く物資を届けるため、懸命に活動を続けています。スタッフからは、日本からの支援に対する感謝の言葉が届いています。

緊急支援が一段落したら、農村の復興が進むよう長期支援に切り替え、これまで同様、地域住民に寄り添った活動を続けていきます。

引き続き、ミャンマーへの温かいご支援と関心をお寄せいただきたく、お願いいたします。

上／壁が崩れてしまったセンターの倉庫
下／ガレキ撤去などに従事する住民らに弁当を手渡す

ミャンマー農業指導者研修センター　スタッフと研修生（5期生）

ミャンマー農村開発研修センター　スタッフ

震災前の彼らの
笑顔が取り戻せるよう
応援してください！

**支援方法は14ページを
ご覧ください！**

海外事業部　藤井啓介

今月のこの人

アブドゥル・ラザク・イパエニン
（愛称：ザキ／インドネシア）

株式会社鶴田工業　技能実習生

私の仕事を信頼してくれる会社に感謝しています！

2020年に技能実習生として初来日したザキさん。日本では、「建物が整然と並ぶ街並みや、充実したインフラや公共サービスに感銘を受けた」と話す一方、基礎研修を受けた西日本研修センターでは、時間厳守の習慣にインドネシアとの違いを強く感じたといいます。日本での生活が5年目となるザキさんに、日本に来た経緯や実習について聞きました。

――日本に来る前はどんなことをしていましたか

私はインドネシアの中でも古い歴史を持つ、マルク州中部マルク県セラム・ウタラ郡にあるサワイ村出身です。10人きょうだいの8番目として生まれました。私の両親は今も村で農業をしていますが、きょうだいのほとんどはふるさとを離れて、それぞれの道を歩んでいます。結婚して夫について行ったり、小規模の事業を営んだり、国内の大学で勉強しているきょうだいもいます。

私は高校時代、学校から大学進学を勧められていましたが、当時、きょうだい2人が大学在学中だったため父の反対にあい、卒業後しばらくは家の農業の手伝いをしていました。そんな中、家計を助けるために就職を考えていたところ、オイスカと協力関係にあった現地NGOにスカブミ研修センターを紹介していただき、17年からセンターの第36期研修生として研修を受けることになりました。しかし、初めて生まれ故郷を離れ、ほかの研修生と寮で共同生活することは簡単なことではなく、数ヵ月で心が折れそうになりました。そんな時は、家族の励ましや、両親を喜ばせたいという思いが力になりました。また、日本での技能実習を終えて帰国した先輩たちが、日本の文化や仕事について話してくれ、次第に日本で技術を学びたいという目標を持つようになりました。18年4月に研修を修了してから2年間は、センターの活動を手伝いながら、日本へ派遣されるチャンスを待っていました。そして20年に技能実習生として来日できたことは、私の人生で最も感謝していることの一つです。

――実習について教えてください

私は2020年から株式会社鶴田工業（福岡県朝倉市）で、実習をしています。建築構造用鋼の溶接について学び、現在は塗装や汚れの清掃などの仕上げ作業を主に担当しています。また、仕上げが完了した資材の移動のためにクレーンを操作したり、後輩の技能実習生に技術的な指導を行うこともあります。

もちろん、日本人の先輩方や仕事のリーダーからもたくさんのことを教えていただきました。機械や工具の使い方が分からなかったときは、詳しく丁寧に説明してくれ、分からないことに焦りを感じることなく、仕事を理解していくことができました。同僚たちは、仕事で私が迷っていると冗談を言って和ませてくれます。また、リーダーの指導は、指導者としてあるべき品格が感じられ、

ガス溶接の技能講習

とても印象に残りました。

――将来の目標はありますか

私はほかの人の仕事を観察するだけで、その技術的な仕組みを理解し、それほど時間をかけずに作業を習得できます。会社は作業目標を達成できるかぎり、私が自由に作業することを認めてくれていて、そのことに感謝しています。

帰国後は、このようにして日本で培った技術や知識を活かし、起業したいと考えています。そして、事業を通じて新たな雇用の機会を生み出し、仕事を必要としている人々の助けになりたいと思っています。目標に向かって、引き続き日本での実習を頑張ります。

溶接の実習

アブドゥル・ラザク・イパエニン

インドネシア マルク州中部マルク県出身。1999年生まれ。高校を卒業後、オイスカ・スカブミ研修センターの研修生を経て2020年に技能実習生として来日。趣味はサッカーとフットサル。

受け入れ企業担当者より ひとこと

株式会社鶴田工業
取締役総務部長／
技能実習担当
鶴田　利夫さん

ザキさんが来てから、早いもので４年８ヵ月になります。当初から塗装班のリーダーに「技能実習期間だけでなく、ずっと鶴田工業で働いてほしい」と言われるほど、厚い信頼を得ていたのを覚えています。建築鉄骨製造の工程の中でも一番地味な作業が続く塗装班の仕事を、毎日自主的に黙々とこなしていくザキさんの姿を見て、私を含め日本の社員も見習わなければいけないと思うほどです。最近では、溶接班が忙しい時は本溶接もするなど、オールマイティーに何でも仕事をこなしてくれています。

またプライベートでは、趣味のフットサルを通して、同じ技能実習生の後輩たちと良好な関係を築き、先輩としてリーダーシップを発揮しています。

ザキさんは、今年の６月に５年間の技能実習を終えて、さらに最大５年間の在留が可能な特定技能I号に移行します。これから新しい目標を立て、さらなる活躍をされることを期待しています。

とある日の

ザキさんの1日

3月のこの日は、ラマダン（ムスリムの五行のひとつである「断食」を行う月）の真っ最中。ラマダン中は日の出から日の入りまでの間の飲食を断つため、早朝の食事から一日がスタートします。

04:30 起床・食事

日の出前の食事（サフール）をとります。

05:30 ファジュル

夜明けの礼拝（ファジュル）をします。

07:30 出勤

自転車で通勤しています！

今日もがんばるぞ！

08:00 業務開始

溶接作業の中でも、特定の企業向けの建築フレームを製作する業務を担当。

12:00 昼休憩・ズフル

同僚のインドネシア人ムスリムの仲間たちと合同で正午の礼拝（ズフル）をします。

17:00 帰宅

日没後の食事（イフタール）の準備をします。

19:30 日本語の勉強

漢字もしっかり習得します！

継続する事が大切です！

―オイスカー 歴史さんぽ

Vol.14

バングラデシュ・チッタゴン 思い出のマングローブプロジェクトハウス

写真から伝わるさまざまな思いにフォーカス！

マングローブ林は大きく成長し、「緑の防波堤」としてサイクロンから人々の生活を守っています

1992年に始まったバングラデシュのマングローブ植林プロジェクト。活動地であるチッタゴンの郊外チョコリアには、日本から植林ツアーで訪れたボランティアの拠点となったプロジェクトハウスがあります。

郵政省（当時）の国際ボランティア貯金などの助成を受けて建てられた事務所兼宿泊施設で、開設当初、周囲は見渡す限りのエビや魚の養殖池でした。近くの集落まで歩いて1時間もかかる場所にあり、夜になると辺りは真っ暗。日中の作業を終えたメンバーが満天の星の下、ハウス前の広場で遅くまで語り合う様子がよく見られました。男女に分かれて大部屋に寝泊りし、毎日数時間かけて船で植林地に出向いて、泥に足を取られながらマングローブを植えた記憶を、今でも懐かしく思い起こす方もいらっしゃるのではないでしょうか。

現在は、マングローブが大きく成長し、周辺はすっかり森となっています。植林地が年々拡大する中で、地元林業局と協働で取り組む新たな植林地との距離が遠くなり、次第にプロジェクトハウスの存在価値も失われていきました。残念ながら開設30年を経て綻びが目立ち始め、賛助会員のUAゼンセンのご支援で補修をしてなんとか活用してきましたが、それも限度を超え、今では閉鎖されています。

OISCA
レストラン

まるごと一羽の迫力！
鶏の丸焼き

西日本研修センターでは、毎年秋に「収穫感謝祭」を開催しています。以前は、イノシシの丸焼きが一番の目玉だったのですが、一昨年から、賛助会員の有限会社三宅農場（鹿児島県霧島市）よりご提供いただいている、まるごと鶏の棒刺しに変わりました。迫力ある丸焼きの様子を見ながら、焼きたてをその場で食べることができ、来場者にも大好評です。

鶏の丸焼きは、クリスマス会などのセンターのイベントでもオーブンで焼いて振る舞われています。ミャンマー出身のティン先生が、収穫感謝祭と同じ調味料を使って美味しく味付けしてくれます。鶏肉の中に、ニンニク、ナンプラー、塩、コショウ、レモングラス、レモン、チキンパウダーを入れ、外側にもまんべんなく塗り込みます。そうして一晩寝かせてから、オーブンで中までしっかり火を通して出来上がり！　味がしっかりしみ込んだやわらかいお肉は絶品です。

今年の収穫感謝祭は11月8日です。研修生に会いに、そして鶏の丸焼きを食べに、ぜひお越しください！

（西日本研修センター T）

FOOD

お！ススメ OISCA

国内外のオイスカスタッフから、さまざまなジャンルの「オススメ」を紹介します！

インドネシアの伝統食品「テンペ」

インドネシアには「テンペ」という食べ物があります。そのまま揚げたり、細かく切って野菜の炒め物に入れたり、食べ方はいろいろです。大豆からできている発酵食品で、煮た大豆を固めたような食感です。ずっしり、しっとりしていて、私はこのボリューム感のある食べ応えが大好きです。実は、日本の業務スーパーの冷凍食品コーナーにも売っているんですよ。今度見かけたら、ぜひ食べてみてくださいね！　（本部Y）

「富士山の森づくり」活動参加者募集！

虫害の影響を受けたシラベの人工林を、多様性豊かな森へと再生する「富士山の森づくり」は、今年で19年目を迎えました。これまで多くの支援者の皆さまに支えられながら、植栽とその後の育林作業を続け、植えた木々は順調に成長しています。春にはヤマザクラが花をつけ、秋にはカエデが紅葉を見せるなど、うれしい変化もみられる一方、台風や大雪、シカによる食害など、厳しい自然環境の中で森林を再生するには、まだまだ多くの力が必要です。

植えた木の成長を見にきてください！

日本人の心のふるさととして親しまれる富士山の森を、100年後の未来につなぐため、ぜひ皆さまのご協力をお願いします。

■**日時**　7月5日(土)
9時半～14時半頃

■**集合場所**
ふじてんスノーリゾート駐車場（山梨県南都留郡鳴沢村字富士山8545-1）

■**内容**
獣害対策ネット補修
（ネットのまき直しおよび支柱交換）など

■**定員**
80名（先着）

■**参加費**　2千円
（昼食代、保険料を含む）

■**申込締切**
6月13日（金）

お申込みはこちらから！

特設サイトはコチラ

ミャンマー地震　緊急募金にご協力ください！
～被災地に希望を届けたい～

https://oisca.org/myanmarbokin2025/

3月28日にミャンマー中部で発生した地震による被害は大きく、ミャンマー国内の2ヵ所の研修センターのスタッフらが行政と連携し、支援活動を進めています。復興までの長い道のりを日本からも応援するため、6月30日まで緊急支援募金を行います。

弁当の配布の様子

がれきの撤去ボランティア

「子供の森」計画参加校にも被害が出ている

支援活動

- 被災した地域住民への飲料水、食料の配布
- がれきの撤去などの活動
- 被災地の復旧・復興につながる支援
- 農業指導者研修センター被災箇所の修繕
- その他、現地のニーズに応じた支援

穏やかな日々が戻るようご支援よろしくお願いします

ご支援方法

❶ **オンライン・クレジット決済**
特設サイトからお申し込みください。

❷ **郵便振替**
お近くの郵便局で手続きをお願いします。
00170-8-386605　オイスカ海外災害支援募金

❸ **銀行振込**
振込日、ご住所、お名前、生年、寄附金額、ミャンマー地震緊急支援である旨を、別途メールまたはFAXにて下記お問い合わせ先までご連絡ください。
三菱UFJ銀行　永福町支店／普通　1163833　公益財団法人オイスカ

❹ **クラウドファンディング**（5月31日まで）
READYFORでも寄附を受け付けています。
https://readyfor.jp/projects/OISCA-myanmar

【お問い合わせ先】
公益財団法人オイスカ（担当：藤井・鈴木）
TEL：03-3322-5161　FAX：03-3324-7111　E-mail：gsm@oisca.org

ご支援ありがとうございます！

新会員の紹介

新しく会員になられた方は次の通り。（1月18日～3月31日までの間、本部登録済分。順不同、敬称略）

■特別法人
【福岡県】株式会社新日本エネックス

■維持法人
【香川県】大洋舗装株式会社【福岡県】NPO法人みらいあん

■維持個人
【北海道】浅山哲也【千葉県】山本照夫【東京都】津野義博【静岡県】中村節子【香川県】金藤友香理【福岡県】岩出久子／野田美紀／河合昭江

サポーターの紹介

2024年4月1日～2025年3月31日までにお申込みのあったマンスリーサポーターは次の通り。（順不同、敬称略）

【茨城県】川崎浩【栃木県】井出曜子【埼玉県】田中美奈【東京都】中村昌人【神奈川県】髙島篤【山梨県】山田晃【静岡県】林里美【大阪府】辻輝也【奈良県】戸田勝久【香川県】小比賀真紀【福岡県】蒲生清一

寄附

1月1日～2月28日までにいただいた寄附は次の通り。（順不同、敬称略）

●九州電力労働組合／海外開発協力事業に100万円
●全国電力関連産業労働組合総連合／「子供の森」計画と海外開発協力事業に合わせて510万円
●九州電力株式会社／西日本研修センターワンコイン・サポートプログラムを通じて人材育成事業に209万4488円
●株式会社宇治川商店／人材育成事業に70万円
●オイスカ国際活動促進福岡県議会議員連盟／人材育成事業に60万円
●コニカミノルタ労働組合／「子供の森」計画に60万円
●ロジスティード株式会社およびロジスティードまごころ基金／富士山の森づくりに100万円
●鈴健興業株式会社／富士山の森づくりに50万円
●ネクスタグループ（ネクスタ株式会社・ネクスタパッケイ株式会社・ネクスタラッピイ株式会社・ミツワ紙工所）／「子供の森」計画と海外開発協力事業と人材育成事業に合わせて55万3049円
●花王株式会社／海外開発協力事業に43万2392円
●リタ・マークス株式会社／海外開発協力事業に35万700円
●仙台トヨペット株式会社／「海岸林再生プロジェクト」に27万4225円
●ハートネット21／海外開発協力事業に20万円
●株式会社Hacoa／「子供の森」計画に19万9407円
●住友化学労働組合／「海岸林再生プロジェクト」に19万4954円
●ホッコー商事株式会社／啓発普及事業に18万146円
●生興株式会社／「子供の森」計画に15万5000円
●北電産業株式会社／啓発普及事業に12万8874円
●全積水労働組合連合会／「海岸林再生プロジェクト」に11万6233円
●北陸電力株式会社／啓発普及事業に11万4801円
●トヨタモビリティパーツ株式会社九州北部統括支社／人材育成事業に11万3228円
●立山科学株式会社／啓発普及事業に10万8322円
●池田浩二（岡山県）／海外開発協力事業に10万円
●株式会社ヤクルト本社／「子供の森」計画に10万円
●山本哥子（福岡県）／人材育成事業に10万円
●薦田稔（福岡県）／2024オイスカ冬募金に10万円

訃報

ヌエバビスカヤ
植林プロジェクト責任者
マリオ・ロペス氏

3月18日、フィリピンのマリオ・ロペス氏が、71歳で逝去されました。故ロペス氏は1982～84年まで静岡県で養蜂の研修を受け、帰国後は、その経験を活かして養蜂を行う傍ら柑橘類の栽培に取り組み、ヌエバビスカヤ州のみかん生産の草分け的存在となりました。また84年には、オイスカの帰国研修生会を立ち上げ、初代会長として後輩の研修生OB・OGを指導してきました。

93年からは、森林伐採の影響で荒廃しているふるさとの山々を再生させようと「ヌエバビスカヤ植林プロジェクト」を開始し、責任者として生涯を通して活動されました。闘病中も、「退院したら日本から寄贈されたブルドーザーで植林地の防火帯を整備したい」と話すほど、強い使命感を持って活動に取り組み、オイスカと共に歩んだ人生でした。

長年プロジェクトを支えてくださっている電力総連をはじめ、日本からの多くの支援者、ボランティアの皆さんに対しても、持ち前の明るさと面倒見の良さを発揮し、たくさんの方々に慕われました。

改めて故人の功績に感謝し、謹んでご冥福をお祈りいたします。

次号予告

OISCA
JULY 2025 | 7

《TOPIC》
木育を通じて進む能登震災支援（仮）

OISCA 5月号
発行人／中野悦子
発行所／公益財団法人オイスカ
〒168-0063 東京都杉並区和泉2丁目17番5号
TEL（03）3322-5161　FAX（03）3324-7111
E-mail oisca@oisca.org
編集：OISCA／吉田俊通　倉本有沙
アートディレクション／土肥幹人
デザイン／土肥幹人　坂巻貴行
印刷・製本／株式会社ケープリント

本誌掲載の記事・写真・イラストなどの無断転載を禁じます。

FSC www.fsc.org アタリ 責任ある木質資源を使用した紙 FSC™ C016564

今月の表紙写真

Photo by Thar Nyi Nyi

乾燥地の厳しい環境でも、政情不安の中でも、希望を捨てず、森づくりを続けてきたミャンマーの子どもたち。安心して暮らせる日々を願い、祈りを込めて木を植える。その澄んだ瞳を守るためにも、今できることを考えたい（ミャンマー・エサジョ郡）

理念 ── 人と育む、地球といきる ──

Vision
実現したい未来

人々がさまざまな違いを乗り越えて共存し、自然と調和して生きる世界

Mission
日々果たすべき使命・存在意義

私たちは、すべてのいのちが健やかに守られるよう、感謝の心を持つ「人」を育み、いのちの土台となる森づくりや、共に助け合う社会づくりに取り組みます

Value
私たちが大切にしていること

- 互いを理解し尊重
- 土から離れない
- 感謝の心を持ち、へこたれない「人」を育む
- 地域に根差し、住民の「良くしたい」を尊重

Spirit
Visionを達成するために、私たち一人ひとりが日々実践する心のあり方

- 先を展望する想像力を持つ
- 着実に一歩ずつ積み重ねる
- 仲間とともにチーム力を発揮する
- 挑戦し続ける
- 経験から学び進化する
- 感謝の心を持つ
- 真摯である
- へこたれない
- 人間味にあふれ、楽しみながら！

公益財団法人オイスカ

オイスカは、会員･支援者の皆さまからの会費や寄附金によって運営されています。「公益法人」としての認定を受けているため、所得税･法人税･相続税、また、条例で定められた自治体では住民税も控除対象となります。受領書をお届けしますので、申告の際にご利用ください。

●特別会員（年額1口）	法人／10万円	個人／5万円
●維持会員（年額1口）	法人／ 4万円	個人／2万円
●マンスリーサポーター	個人／月々 2,000円～	

※特別会員と維持会員には、会員としての差異はなく、口数とともに、自由にお選びください。
※会員、マンスリーサポーターの皆さまには、広報誌「OISCA」をお届けします。
※新入会年度は、入会月によって納入金額が異なります。

●「子供の森」計画支援金（年額1口）　個人･法人／5,000円

※海外の支援地域の活動案内（年1回）やニュースレター（年2回）をお届けします。
※子どもたちからのグリーティングカード（年1回）が届きます。

ウェブからも支援のお申し込みができます ▶ https://oisca.org/

お問い合わせや資料請求のお申し込みは

公益財団法人 オイスカ
〒168-0063 東京都杉並区和泉2-17-5
TEL (03) 3322-5161 FAX (03) 3324-7111
E-mail oisca@oisca.org
https://oisca.org/

国内研修センター

中部日本研修センター	〒470-0328 愛知県豊田市勘八町勘八27-56 TEL0565-42-1101 FAX0565-42-1103
関西研修センター	〒563-0101 大阪府豊能郡豊能町吉川120 TEL072-738-3699 FAX072-738-3901
四国研修センター	〒761-2103 香川県綾歌郡綾川町陶5179-1 TEL087-876-3333 FAX087-876-3334
西日本研修センター	〒811-1112 福岡県福岡市早良区小笠木678-1 TEL092-803-0311 FAX092-803-0322

国内支部

北海道支部	〒062-0931 札幌市豊平区平岸1条1丁目8-8 ラルズ生活研究センター1F TEL011-867-9684 FAX011-867-9685
宮城県支部	〒980-0014 仙台市青葉区本町2-10-28 カメイ仙台グリーンシティビル6F TEL022-265-3350 FAX022-281-9077
首都圏支部	〒168-0063 東京都杉並区和泉2-17-5 (公財) オイスカ内 TEL03-3322-5161 FAX03-3324-7111
山梨県支部	〒400-0016 甲府市武田1-2-5 3F TEL055-267-5951 FAX055-267-5951
長野県支部	〒380-0838 長野市県町584 長野県経営者協会総務部内 TEL026-235-3522 FAX026-235-3529
富山県支部	〒939-2226 富山市下タ林280-3 TEL076-468-7120 FAX076-468-7128
静岡県支部	〒431-1115 浜松市中央区和地町5815 TEL053-401-3980 FAX053-401-3981
愛知県支部	〒470-0328 豊田市勘八町勘八27-56 オイスカ中部日本研修センター内 TEL0565-42-1162 FAX0565-42-1103
岐阜県支部	〒503-8603 大垣市久徳町100番地 太平洋工業㈱本社内 TEL0584-47-9420 FAX0584-47-9419
関西支部	〒541-0058 大阪市中央区南久宝寺町4-4-1 新御堂ビル TEL070-5550-7394
広島県支部	〒730-0041 広島市中区小町4-33 ㈱エネルギアL＆Bパートナーズ内 TEL082-242-7804 FAX082-242-4706
四国支部	〒761-2103 香川県綾歌郡綾川町陶5179-1 オイスカ四国研修センター内 TEL087-876-3333 FAX087-876-3334
西日本支部	〒811-1112 福岡市早良区小笠木678-1 オイスカ西日本研修センター内 TEL092-803-0311 FAX092-803-0322

OISCA NETWORK

福島	〒963-0534 郡山市日和田町字大窪50-8 ㈲根本産業内 TEL024-958-2643 FAX024-958-3741
茨城	〒311-0113 那珂市中台852-9 TEL029-298-2539 FAX029-298-2539
神奈川	〒231-0021 横浜市中区日本大通り33 神奈川県住宅供給公社ビル1F TEL03-3322-5161
三重	〒510-0958 四日市市小古曽1-1-7 中村建設㈱内 TEL059-345-1101 FAX059-345-0745
奈良	〒630-8444 奈良市今市町53-6 TEL0742-63-6277 FAX0742-63-6277
徳島	〒770-8555 徳島市寺島本町東2-29 四国電力㈱徳島支店総務課内 TEL088-656-4593 FAX088-656-4511
愛媛	〒790-0924 松山市南久米町乙24-84 TEL070-8524-0349 FAX089-948-8682
高知	〒780-0870 高知市本町1-6-24 高知商工会議所総務企画部内 TEL088-875-1177 FAX088-873-0572
佐賀	〒840-0826 佐賀市白山2-1-12-4F TEL0952-28-1368 FAX0952-28-1368
長崎	〒858-0908 佐世保市光町109 ㈱堀内組内 TEL0956-47-2127 FAX0956-48-5069
熊本	〒865-0055 玉名市大浜町2173-1 丸光グループ本社内 TEL0968-76-2161 FAX0968-76-2162
大分	〒870-0001 大分市生石港町2-12-14 ㈲大地企画内 TEL097-533-2101 FAX097-533-5040
宮崎	〒880-0879 宮崎市宮崎駅東2-4-9 TEL0985-26-5673 FAX0985-26-5673
鹿児島	〒892-0817 鹿児島市小川町15-1 ㈱南日本総合サービス内 TEL099-224-3833
沖縄	〒902-0077 那覇市長田2-12-9 セレクション長田101 TEL098-943-2871 FAX098-943-2881

■令和7年5月1日印刷 ■令和7年5月5日発行 ■オイスカ ■通巻716号